

エッセイ

小特集 「複数言語のはざままで日本を考える」

趣旨文

磯前 順一

日文研において行われる日本研究を国際的な文脈に移し替えていくことは、海外の研究者にとっても、国内の研究者にとっても大切な使命のように思われます。しかし、海外と違って、それぞれの国によって文化も社会事情も異なります。そうした複数の国々の間で、私たちは日本研究をどのように研究したり表現してきたのでしょうか。あるいはこれからどのようにしていったらよいのでしょうか。その課題は、今日の翻訳研究やポストコロナアル研究とも大きく重なります。また、三言語以上の複数言語を操ることが当然となっているヨーロッパの学界や、日本語を習得しなければ、自国の近代のことを学ぶことのできない場合もあるアジアの旧植民地での文脈は、英語のみをもって国際言語とする状況とはずいぶん異なるように思われます。そのあたりをみなさんのご協力を得て、考えていければと思います。

日文研では「モノグラフ」の出版によって、英語圏に発信をしています。しかし、英語圏と

いうのは英国と米国だけでなく、もっと広い読者層の獲得を意味します。そして、所長裁量経費などで、別の言語での翻訳企画の支援もしております。あるいは客員研究員の方の中には、四言語以上の言葉に通じている方もいらっしゃいます。そうした方々のご協力を得て、それぞれのご経験を踏まえた興味深いエッセイをここに掲載することが出来ました。味読頂けましたら、幸いです。

（国際日本文化研究センター准教授）

〈翻訳〉の耐えられない不純さ

三原 芳秋

思えば、日文研との〈コンタクト〉は、いつも「複数言語のはざま」にあったような気がします。最初に桂坂を登ったのは、磯前順一さんが主催した大規模な国際会議「京都学派と『近代の超克』―近代性、帝国、普遍性」における同時通訳を依頼されたときでした（『日文研叢書 四七』に結実した国際会議です）。国連安保理のような立派な会議室を見下ろす同時通訳ブースに二日間監禁され、英語と日本語の〈はざま〉で自分の主体性が喪失していく、という壮絶な体験をしました。二度目は「木曜セミナー」で、堀まどかさんの野口米次郎論へのゲスト・コメンテーターとして、お呼ばれしました（堀さんによる報告文が『日文研』五一号に